

特別支援学校としての専門性を
蓄積・担保・共有するための研修に関する一考察

福田 浩・南雲亮太・堀込直道・木山慶子

群馬大学教育実践研究 別刷
第41号 259～266頁 2024

群馬大学共同教育学部 附属教育実践センター

特別支援学校としての専門性を 蓄積・担保・共有するための研修に関する一考察

福田 浩¹⁾・南雲 亮太¹⁾・堀込 直道¹⁾・木山 慶子^{1, 2)}

1) 群馬大学共同教育学部附属特別支援学校

2) 群馬大学共同教育学部保健体育講座

A study on training to accumulate, secure, and share expertise as a special needs school

Hiroshi FUKUDA¹⁾, Ryota NAGUMO¹⁾, Naomichi HORIGOME¹⁾, Keiko KIYAMA^{1, 2)}

1) Gunma University Cooperative Faculty of Education Affiliated Special Needs School

2) Gunma University Cooperative Faculty of Education, Department of Health and Physical Education

キーワード：特別支援学校, 専門性, 蓄積・担保・共有

Keywords: Special needs school, Expertise, accumulate, secure, and share

(2023年10月23日受理)

1 背景と目的

1.1 求められる専門性の現状と課題

平成19年4月に特別支援教育が学校教育法に位置付けられてから、早15年以上が経過した¹⁾。この間、文部科学省やその諮問機関等から出された通知や報告書などにおいて、特別支援教育における教師の専門性を向上させることが求められてきた。それらを受け、大学での養成課程や教育委員会等の研修など、特別支援教育に関する専門性を高める学びや研修の充実とともに、特別支援学校をはじめ、小中学校等においては校内研修により、教師の専門性の向上を図ってきている。こうした中、令和3年1月、新しい時代の特別支援教育の在り方に関する有識者会議の報告²⁾において、「特別支援学校では、経験豊富な教師の人事異動や定年退職により、学校としての専門性が蓄積されにくく、個々の教師の専門性の向上だけではなく、学校全体としての高い専門性を担保・共有するための仕組みづくりが必要である。また、一定の専門性を有した

教師の人事異動により、学校としての専門性が大きく低下しないよう、学校が組織として専門性を担保・共有していく仕組みが必要である」ことが述べられた。これまで多くの特別支援学校では、校内における研修の時間を設定し、授業研究や学校外の専門家等による講演会など、学校独自の研修により教師の専門性を高める努力をしてきている。今回の報告を受け、人が代わっても特別支援教育に関する専門性が低下することなく蓄積され、担保・共有される研修の在り方がこれからの特別支援学校に求められている。

一方、現在、学校現場では働き方改革として、子どもと向き合う時間を確保する中で、行事等を精選したり見直したりするとともに、勤務時間内における業務の在り方についての改革が進んでいる。こうした中で、研修に取り組む時間を確保しつつ、内容を精選して行うなど、専門性を蓄積・担保・共有するための研修をいかに位置付けるかは、学校に問われる課題である。

そこで、本研究は、こうした働き方改革が進む中

で、特別支援学校としての専門性やその研修について検討するとともに、実際の研修活動を通して、特別支援学校に求められる専門性を蓄積し、担保・共有していくための研修について考察することを目的とした。

1.2 特別支援学校としての専門性のとらえ

(1) 教師の専門性にかかる先行研究

石塚(2012)は、特別支援教育の専門性について「この教育を担当する教員は、一般の教員が有しない、この教育に関するベーシックな専門性が身に付いてなければならないはずである」として、特別支援学校の学習指導要領における記述内容から専門性の内容についての試案を作成している。具体的には、「障害の理解と基本的な対応」「指導目標の設定」「指導内容の選択」「指導方法の工夫」「指導に関する評価」「ティームティーチングに関すること」「教育相談やセンター的機能に関すること」「研究に関すること」の8つの視点と「初任層レベル」「中堅層レベル」「指導層レベル」の3つのレベルを想定している³⁾。

柴垣(2017)は、特別支援学校教員に求められる専門性として、①教職に対する責任感、探求力、教職生活全体を通じて自主的な学び続ける力、②専門職としての高度な知識、③総合的な人間力の3つをあげている。とりわけ、②については、障害のある子どもの教科や教職に関する高度な専門的知識と、障害特性に応じた学びを展開できる実践的な指導力、教科指導、生徒指導、学校経営等を的確に実践できる力とするなど、幅広い専門性の内容について述べている⁴⁾。

こうした先行研究にある特別支援教育の専門性を有する教師の総体が、特別支援学校であり、その学校としての専門性が今、求められている。

(2) 専門性の向上を図る校内研修

特別支援学校では現在、学校研究や授業研究、専門家を講師に招く研修、特定のメンバーによるOJT研修や自主的に行う研修など、専門性を高めるための研修が行われている。

久道・小谷(2020)は、特別支援学校の専門性の担保と向上のための校内研修について、研修担当教員への質問紙及びインタビュー調査を基に、実践できうる具体的な取り組みは授業づくりに関する研修を行うことで、教師の主体的な研修参加を促すこと、講義

による研修を減らして活動のある研修をふやすことなどを述べている⁵⁾。学校研究にかかる授業づくりや授業の振り返りに対する意見を共有するいわゆるワークショップ型研修の取組は現在、広がりを見せており、多くの学校で工夫して行われている⁶⁻⁸⁾。

こうした授業実践を通して学校研究の目的にせまる研修の一方、授業以外の内容についても、ワークショップ型研修に取り組む学校もある。

澤田(2022)は、特別支援学校の校内指導員として、初任者や2年目以降の若手教師の指導力向上をめざし、教員同士の対話を生み出すラウンドスタディ形式を取り入れ、初任者が希望するテーマについて、小グループでメンバーを変えて話し合い、最終的に話し合ったことを発表するという、いわゆるワークショップ型研修を取り入れている。参加した教員が「自立活動とは」や「各教科を合わせた指導とは」、「教科別の指導とは」などと、学び合うことができたとしている⁹⁾。

以上のような先行研究や実践から、特別支援教育に求められる専門性が広範囲に渡っていることを踏まえ、学校としての専門性を高める研修の在り方を検討していく必要があると考える。先行実践にあるように初任者や経験年数の少ない教師などから希望する研修内容を聞き取り、それを授業研究のように学校全体で意見交流する研修に取り組むことは、学校として専門性を蓄積し、担保・共有する上で具体的・実際的ではないかと考える。

(3) 専門性にかかる研修の内容及び方法の検討

現在、多くの学校で、勤務する教師の特別支援教育における教職経験や研修経験が多様化している。そうした多様化する教師集団が直面する専門性の内容は、特別支援教育の経験の長短や研修の有無にかかわらず、教師自身が日頃取り組んでいる教育活動そのものの中にあり、研修として取り上げる内容は、教師集団からの聞き取りや教育活動上の必要性等から考えられる内容を取り上げ、自らの考えや実践を振り返り共有していくことが学校においては実際的ではないかと考える。

また、研修方法については、前述のとおり、共有することのできる研修として、ワークショップ型研修が特別支援学校において広がりつつある。学校現場では現在、働き方改革により、勤務時間を意識した実践等

の見直しが進んでおり、その中では会議や研修の持ち方等も限られた時間の中で行うことを検討することになりうる。働き方改革が進む中で、研修を通して担保・共有する専門性を蓄積できるものとしていく上でも、ワークショップ型研修を通して、職員同士が互いに尊重し合い、チームとなって取り組むことのできる雰囲気や方法を取り入れることが望まれてくると考える。

以上のことを踏まえ、本研究では、G大学附属特別支援学校において、専門性にかかる研修内容を取り上げた校内研修を実施する。研修内容に対して、教師一人一人が日々の実践で大切にしたり工夫したりしていることの見聞交流の結果と、研修直後の参加教師の感想等を基に考察し、学校としての専門性の蓄積・担保・共有に向かう研修の在り方を検証していく。

2 対象と方法

2.1 専門性にかかるワークショップ型研修

(1) 実施時期

2023年7月下旬

(2) 対象

G大学附属特別支援学校の教師21名

(3) 研修内容

本研修では、校内授業研究会に参加したG県立特別支援学校の初任者教師に対し、自由記述形式のアンケートにより、実践上の困りごとについて回答数が多かった次の3つを内容とした。

- 実態差のある集団の授業づくり
- 多動や他害のある子どもへの対応
- 教材・教具の作成

(4) 研修方法

3つの研修内容を基に、ブレインストーミングとKJ法の手法を用いて、教師一人一人が日々の実践で大切にしていることや工夫していることについて意見を出し合い共有するワークショップ型研修を実施した。意見交流するグループは、3つとも経験年数や小中高の所属学部が偏らないように可能な限り分けて編成した。

① 研修実施前の事前説明

ワークショップ型研修を実施するにあたり、参加教師には「特別支援学校で勤務を始めた初任者の困りごとは、特別支援学校で勤務する上で直面する専門性にかかる課題であり、それらを、普段どのように大切に、工夫しているかを見つめて共有することは、特別支援学校である本校の蓄積すべき専門性を考えることにつながるのではないか」という仮説と、以下の研修の手順等の事前説明を行った。

1) 研修内容及び方法についての事前説明

○3つの研修内容について、自分が普段大切にしていることや工夫していることをあらかじめ付箋に書いて、研修当日に持ち寄る。

○考えは、できるだけ短い言葉で付箋に書き出す。

2) 当日の研修の流れ

○4つのグループに分かれて考えを出し合う。

(グループは内容ごとに異なる編成をする)

○1つの研修内容について約30分(協議20分、発表3分×4グループ)。休憩を挟み3回実施する。

○各自持ち寄った付箋を、模造紙に張り出しながら説明し、共有する。

○同じような内容があれば集め、集めた言葉をまとめる言葉をつける。

○最後にグループごとに発表し、全体で共有する。

② 研修の実際

3つのテーマについて、それぞれ時間を決め、休憩をはさみながらブレインストーミングとKJ法の手法を用いたワークショップ型研修を実施した。あらかじめ内容を説明してあったこともあり、参加教師一人一人がそれぞれの内容に対して複数の意見を付箋に書いて持ち寄るとともに、時間いっぱい意見交流した。図1は、「実態差のある集団の授業づくり」についてグループごとに出された意見である。

2.2 意見交流による共有後の資料等の提示

3つの内容についての意見交流終了後、筆者が専門書等の文献から研修内容それぞれに関係する内容の箇所を資料として提示し、本研修のまとめとした。また、数日後に予定していた校内で行う大学教授による

講義の中で、多動や他害への対応等について、本研修を踏まえた内容の話題提供をお願いした。

2.3 事後の振り返りのアンケートの実施

研修会直後に、参加した教師に対し、「初任者教師の困りごとについて、意見交流したことへの感想」と

「実態差のある集団の授業づくり」で大切にしていることや工夫していること

※「○」は、関連する意見をまとめてまとめた言葉 「・」は教員からの意見

Aグループ

- 実態把握
 - ・実態把握
 - ・大切だけど難しい
 - ・いろいろな先生等へ話しを聞く
 - ・実態把握表の活用
- ねらいの設定
 - ・学習集団全体のねらい（テーマ，ゴール，最小公倍数，最大公約数）
 - ・実態差があるからこそ，全体のねらい，環境など
 - ・事前の授業構想（個・全体のねらい，指導計画，支援具，ペア）
 - ・個別学習をしている場面でも，やりとりができるような促しをする
 - ・学び合いができるように
- 教材
 - ・肢体不自由と知的の場合，材料は変えず，教具や支援方法を考える
 - ・全員が参加できそうなものの中で難易度を考える。興味・関心
 - ・同じ内容の教材でも，子どもに合わせて設定（漢字，ひらがな，イラストなど）
- 一斉授業
 - ・一斉授業＝空間の共有（T・T，ねらい）
 - ・集団が動く中でも，個への配慮は忘れずに
- 子ども同士のかかわり
 - ・子どもの取組の様子を周囲へ伝える
- T・T
 - ・存在の把握。お互いの状況，全体＋個別にならないように
 - ・ねらいの共有をしたい
 - ・個々のねらいをホワイトボードに書いて確認できるようにしておく
 - ・共有する時間をもつことが難しいので，メモを残すとか，引継ぎシートを
 - ・授業前後のすりあわせ

Bグループ

- 集団での学び
 - ①実態
 - ・実態把握（実態調査表，特性）
 - ②課題
 - ・共通する課題（教科の指導事項等をベースにして）や，共通する興味・関心を見つける
 - ・取り組むことを同じにして，課題を個別にする
 - 例）数学：みんなですら（マスの課題を交える），音楽：みんなリズム（リズムを分ける）
 - ③目的
 - ・目的は一緒，目標は個別
 - ・全員が参加できる 目的を共有できる活動を設定。個々の役割を考えておく
 - ※目的と活動は行き来し，見直すようにする
 - ④個々の具体的な活動
 - ・無理なく，工夫する
- 個の学び
 - ①教師のかかわり
 - ・個々での活動の場合，教師がうまく間に入る。（子ども同士のかげはし役）
 - 例）活動内容や作品の紹介，一緒に誘ってみる→そこから芽生える感情もあるかも
 - ・T・Tの活用
 - ②環境
 - ・環境構成（席の配置，ペアの設定）
 - ③グループ
 - ・実態差が大きい場合，展開部に個々の学習を取り入れる。
 - ・導入・まとめを全体で行う
 - ・T・Tで2～3人の教員がいるので，一斉の中で小グループを作って授業する
 - ・それぞれの目標に対する学習時間の確保（グループなど）
 - ※個と集団は，毎時間見直す
- 個と集団とをつなげる支援
 - ・合理的配慮（視覚支援だけでなく）
 - ・イラストや音とかでわかりやすく
 - ・日常の中で物とのやりとり
 - 例）朝の会の中で，友達に呼びかけなど，コツコツかかわりを作る
 - ・支援具（アイテム）の工夫でみんなと同じ活動
 - ・子ども同士で評価し合う場面をつくる
 - ・「上手だね」「いいね」だけでなく，どこがよいのか，見るポイントを具体的に伝える

Cグループ

- ねらい，課題
 - ・それぞれの学習の段階を細かくみて，教材・題材の中で学習できることを細かくリスト化して全員に合致するように教材を決める
 - ・課題分析。動作（技能），スキルを細かく区切る（細分化する。一つ一つのステップを成功させていきゴールをめざす）
 - ・モデルステップ（難易度，量，最初→順に，ゴールから徐々にさかのぼる，時間，場所，距離，人，手助けの量，手助けの種類）
- 教材設定
 - ・一人一人扱う内容（活動）は異なるが，共通のテーマがある
 - ・たくさん役割があるような包括的な教材，題材を考える
 - ・ゴールは同じ
- 興味・関心
 - ・共通の興味・関心をもとに活動を考える
 - ・全員で行う活動で，ゲーム形式にしたところ，生徒の興味を引き出しやすかった
- 指導計画
 - ・個と集団を往還
 - ・個→集団の一方通行ではなく，子どもの様子に合わせて行き来する
- 役割（実態差のある中で，上位～下位の全てを保障できる）
 - ・一人一人の子どもの得意を生かして役割を与えたりする
 - ・教師が生徒同士の間をつなげる役割なる
- 場の設定
 - ・一人一人の子どもに合った（適した）活動を設定する（できる状況づくり）
 - ・一斉に行うが内容は一律ではない（考え方）
- つなげる
 - ・T・T連携を明確にするために役割の分担など明確にしておく
 - ・生徒－教師－生徒
 - ・T・Tの形態はいろいろある（各教科によって異なる）
 - ・子どもの組み合わせ（似ている，凹凸）

Dグループ

- 授業前に大切にしていること
 - ・授業準備
 - ・実態把握
 - ・個々のねらいをはっきりさせる
 - ・全体での活動，個別での活動の時間をつくる
- 授業内の工夫
 - <教師が生徒への働きかけ，支援具>
 - ・子どもに応じた支援具を活用して共に活動できるようにする
 - <活動内容の整理，わかりやすく>
 - ・ルール（流れ）を簡単にする。あるいは，分かりやすく提示する
 - ・授業の流れをかえない。①→②→③でやることを決め，大元の形をかえずに繰り返して行い，児童がやるべきことが分かるようにする
 - ・全体の目的と個々の活動を整理する
 - ・単元の中で，授業時間の中で一緒にできることを考える
 - ・やり方，方法を子どもが選べるようにする。選択肢を多くする
 - <役割を持たせる>
 - ・実態に合わせた役割をもたせてグループ活動
 - ・集団に入れない子がいたら教師が誘う
 - 例）①やることがわからない場合は，一緒に活動する
 - ②子どもが何か意図があつて集団から離れている場合は，その気持ちに寄り添う（離れた場所から一緒に）
 - <子どもの興味関心を入れてわかりやすく>
 - ・イラストや音とかでわかりやすく
 - ・フローナする場面を増やす
 - <環境の設定>
 - ・席など環境の工夫
 - ・お互いの活動が見える環境設定
 - <言葉がけ>
 - ・児童が活動に入れるような言葉がけ
 - <T・Tの連携（情報共有，役割分担）>
 - ・子どもの動きや思考を言葉にして，みんなに伝えて教員がひろいながらつなげていく
 - ・T・Tの役割と連携
- 授業後
 - ・席の見直し
 - ・活動にあきていたら少し内容をかえる
 - ・子どもの反応を見て，活動，ねらいの見直し
 - ・できたこと，興味をもったことを見取る
 - ・今日の子どもの様子の振り返り

図1 研修の中でグループごとに出された意見等

「ブレインストーミングとKJ法による意見交流についての感想」を、自由記述による振り返りのアンケートとして実施した。

3 結果

研修の実施直後、協議した内容と意見交流について、参加教師にとったアンケート結果は、以下のとおりである。なお、アンケートの回答は原文のまま記載する。

3.1 協議した内容についての意見、感想等

- ・初任の先生方が困っていることは、現状の私たちが困っていることと重なることがたくさんあり、それをみんなで話し合うことで、同じように考えていたことへの不安感や新たな考えを知る機会となったことが良かったと思います。
- ・大変勉強になった。今後活かしたい。ヒントが得られた。
- ・自分が着任した年にこういう機会がほしかったです。初任者の困りごととは自分の困りごとでした。
- ・初任者教諭と同じ困りごとをかかえていたので、意見交換がとても役だった。特に他害児童への対応の環境設定は実践したいと感じた。
- ・3つとも初任者に限らず、本校にとっても、また、特別支援学校の教員にとっての永遠の課題と感じました。
- ・初任者の困りごとは、ベテランになっても難しく、大切にしなければならない点だと思いました。今までの口伝等などで伝わっていたことが明文化されたことは、今後の大きな財産になると思いました。
- ・どのグループも大切なポイントを押しえられていて安心しました。
- ・自分自身が日頃どんな気持ちで子ども達とかわかっているかわかり、整理することができました。
- ・先生方の意見も参考になり、ありがたかったです。
- ・改めて授業作りや子どもの対応の基本的な部分を考察できました。
- ・初任者だけでなく、今も悩んでいるところが3点あったなと思いました。ただ、今の自分にとって解決策や考えが増えたなと実感しました。
- ・自分が普段どのように、子どもと関わったり教材を作成したりしているかを振り返る時間になりました。また、新たに知る視点が出たり、内容を整理されたりしたことで、今後の自分にも大きく役立てられそうな研修となりました。
- ・大変有意義な時間でした。
- ・同じ教員だからこそ、似た意見や考え方が出てきて、自分自身のやり方が間違っただけではなかったんだと安心したり、嬉しかったりしました。
- ・自分は別の意見が出たときは、「そんな視点があったのか」と新しい発見があり、また一つ勉強になることが多かったです。

- ・個人で勉強したこと、日々の指導でやっていることを、みなさんと意見を出し合い共有、発展させるこの流れはまさに、個別最適と協働的な学びに通じると思いました。個人とみなさんとを踏まえて、もう一度、個人で深めて、つまずいたらまた、みなさんと相談してなどを繰り返す、まさに、個と集団の往還が大事なんだと自分自身で体験してみて改めて感じました。
- ・6年前を振り返ると私も同じようなことに悩み、つまずいていたなと思いました。改めて私自身も考えるきっかけにできてよかったです。
- ・普段あたりまえのように考えている授業作りや教材づくりについて、あらためて言語化することが難しかったです。あらためて自分の授業づくり、教材づくりを考え直す機会となりました。
- ・悩みは常にあるのだと感じました。
- ・大変有意義な時間でした。ありがとうございました。
- ・初任者の困りごとでしたが、自分たちが日々重点をおいて指導・支援している内容で、共通する部分が多くあると感じました。
- ・自分は初任者の頃を思うと、困りごとについて意見をもらえるのは限られた人数でした。こんな機会があるとよかったです。本校は、3年経験者以降の先生方で構成されていますが、特支経験のない方もいるので、可能ならば今後も4～5月とかにできるといいなと思いました。

3.2 意見交流についての意見、感想等

- ・先生方の工夫を知ることができてよかったです。
- ・一つの考えの中でも、多くの工夫や意識、過去の経験があるのだと思いました。
- ・自分とは違う視点だったり、同じ考えを持って連携したりしていることが改めて分かりました。
- ・いい意見がたくさんあって勉強になりました。着任者や校内の誰かの困りごとなど、今後自分たちでテーマを出し合って話し合うなどできると、お互いに助け合ったり、安心感を得たりできるかもしれないと思いました。
- ・そんな考えかもあったのか、と新たな考えを知ることができたので良かったです。自分の考えを言葉で伝えることが苦手なので、伝えたいことを伝えられる力をこれから身に付けていかなければと思いました。学ぶ姿勢、忘れずに大切にしていきたいと思いました。
- ・どのグループに行っても、自分意見をしっかりと言うことができる雰囲気、人間関係があると思いました。日頃から子どものことをしっかりと考え、チームで取り組んでいくという意識があるからこそだと思っています。また、普段からコミュニケーションをたくさんとっていますので、とても風通しのよい学校だと思います。
- ・自分にはなかった意見・視点が聞けてよかったです。
- ・学部を越えて、意見交換できる機会が普段なかなかないから貴重だった。
- ・学部の実態を知る機会にもなった。

- ・とても参考になりました。経験豊富な方の意見、校外に向けて発信ばかりしているので、校内で聞ける機会は意外と少ないことに気づきました。
- ・勉強になることばかりでした。先輩にもたくさん悩んでいる方がいて、その中で私が悩まない訳ないなと感じました。
- ・情報の共有、引継ぎが大切だと感じました。
- ・先生方が、自身の経験を踏まえて、多角的にテーマに対しての意見を述べていて、私自身も改めて気付かされることが多くあり、有意義な時間となりました。
- ・共通認識の点を再確認、新たな視点での意見を学部を越えて共有でき、とてもよい研修となりました。
- ・司会や記録など、全員が行う機会があることは、今後の本校の授業研究会などにも有効だと思いました。様々な視点から意見が出ていましたが、出ていた意見を授業や生活で一つでも多く取り入れられるようにしていきたいと思いました。
- ・具体的な事例をもとにして話すことができ良かったです。
- ・自分の考えや思い、日頃やってきていることへ自分自身がジャッジ、確認することができ、とても良い機会になりました。
- ・同じ意見や思っていない意見が出て勉強になりました。
- ・意見交換をして、先生方も同じ考え方をしていることに安心したり、新たな考え方を知ったり、先生方とお話する中で、新しい考え方が浮かんだりして大変勉強になりました。
- ・司会の進行に沿うことでキーワードが出たり、違う視点から話しを進めることができました。同じ考えを持っている場合もあったり、思っていたことだけど言語化していなかったことを言葉で説明してくれ、とても勉強になり、他学部との先生とたくさん話せてよかったです。
- ・自らの指導や考え方をブラッシュアップする良い機会になりました。

4 考察

ワークショップ型研修に参加した教師の研修直後の感想や意見をもとに、実施した研修の有効性を考察し、特別支援学校としての専門性の蓄積・担保・共有に向けた研修について整理する。

4.1 協議した内容に対する感想等を受けて

協議した内容に対する教師の感想等について、まず、「現状の私たちが困っていることと重なる」「同じ困りごとをかかえていた」「特別支援学校の教員にとっての永遠の課題」「ベテランになっても難しく」「同じような悩みにつまずいていた」「自分たちが日々

重点をおいて指導・支援している内容」など、初任者教師の困りごとを自分自身に重ねている感想が多くあげられた。教職経験や研修経験を比較すれば、困りごととしての度合いは異なることが考えられるが、出された感想等から、自分事としてとらえて協議していることが分かった。

また、「役だった」「参考になり」「解決策や考えが増えた」「新たに知る視点」「勉強になった」など、意見交流や全体での共有することを通して、同じ職場の中でも教職経験や研修経験から持ち合わせる専門性の違いに触れることになり、研修内容を深めることにつながったことが分かる。さらに、「今後も4～5月とかにできるといい」といった提案の意見があり、同じ内容を通して、日頃大切にしていることや工夫していることについて全体で共有することの必要性が伺えた。

4.2 意見交流に対する感想等を受けて

意見交流に対する教師の感想等について、まず、「経験豊富な方の意見が参考に」「先輩にも悩んでいる方がいて」といった若手教師と考えられる感想と、「自らの指導や考え方をブラッシュアップする良い機会に」「改めて気付かされることも多くあり」といった中堅またはベテラン教師と考えられる感想とが入り交じっているが、教職経験の長短等にかかわらないグループにしたことで、同じ内容について気兼ねなく語ることができ充実した意見交流になったことが分かる。

また、「学部の実態を知る機会に」「学部を越えて共有」「他学部の先生とたくさん話せて」など、同じ研修内容について所属学部を越えた意見交流ができたことも成果であることが分かった。さらに、「着任者や校内の誰かの困りごとなど、今後自分たちでテーマを出し合って話し合うなどできるとよい」といった提案の意見があり、一人の困りごとを全職員で共有することの必要性が伺える。加えて、「情報の共有、引継ぎが大切」という意見があり、今回研修で出された多くの意見をそのままにせず、意見交流した内容ごとにA4サイズ2枚程度の文章に整理してまとめ（資料1）、改めて職員へ配布し共有した。今後、着任者研修の資料にするなど、活用していく予定である。

4.3 専門性を蓄積・担保・共有する研修

本研究で実践として取り上げた研修では、専門性にかかる内容について、教職経験の長短等にかかわらず、教師一人一人が日頃から大切にしたり工夫したりしている自分自身の考え方や実践そのものを語るとともに、意見交流を通して互いの取り組みを確認し合うことができた。そして、出された意見等を整理したことで、現時点での学校の専門的な考えとしてまとめ残すことができた。このことはすなわち、今回の研修が一人一人の教師の総体である特別支援学校としての専門性を蓄積・担保・共有する上で、有効であったと考える。

以下に、今回の実践成果をもとに、特別支援学校としての専門性を蓄積・担保・共有するための研修を整理する。

- 研修で取り上げる内容について、若手教師に限らず、職員全体から出し合った困りごと等の中から取り上げる。
- 意見交流の際、実践のエピソードも含めて、自分自身のことが気兼ねなく語れるように、研修内容について一人一人が「大切にしていること、工夫してい

ること」として考えてもらうようにする。

- 研修の方法としては、教職経験等、多様な職員が意見を交流することのできるワークショップ型研修を取り入れる。
- グループで意見交流をする際、経験年数や所属学部等が偏らないように可能な限り分けて編成する。
- 働き方改革として勤務時間内で行える研修になるよう、例えば、本実践のように付箋を使った意見交流をする場合、研修内容の事前説明を行い、参加者があらかじめ意見を付箋に書き込んでくるようにする。また、長期休業中や職員会議後の短い時間など、実施可能な時間を意図的・計画的に設定する。
- ブレインストーミングやKJ法の手法等により出された意見等は、関連する内容等で整理してまとめ、記録として残すとともに、引継ぎ資料等にする。

なお、ここに整理した研修は、学校現場における具体的・実証的な研修の一つととらえるものであり、この研修スタイルが全てではないと考えている。授業研究や講師による講義、OJT研修なども教師の専門性を向上する上で必要であるものととらえる。ただし、

実態の異なる学習集団に対する授業づくり
G大学附属特別支援学校

<p>0 はじめに 特別支援学校では、一人一人実態の異なる学習集団に対する授業が行われる。その際、子ども一人一人の実態を把握し、個別のねらいを押さえた上で、共通する課題や興味・関心を基に、集団や個の学習に取り組むことになる。</p> <p>以下に、実態の異なる学習集団に対する授業づくりにおいて、本校が大切にしていることや工夫していることを述べる。</p> <p>1 授業前 (1) 実態把握 実態の異なる集団における授業づくりにおいて、実態把握は何より大切である。本校では、ホームページでも公表している各教科の実態調査表を活用し、実態を把握している。また、日常生活の中から興味・関心なども併せて把握している。こうした実態把握を基に、共通する課題や共通する興味・関心を見つけ、ねらいや学習活動を組み立てていくことになる。</p> <p>(2) 教材設定 教材を設定するにあたっては、次のようなことを押さえることが大切である。</p> <p>○一人一人扱う内容(活動)は異なるが、共通のテーマがある(取り組むことを同じにして、課題を個別にする)。 例) 数学: みんなですごろく(マスの課題を変える)、音楽: みんなでリズム</p>	<p>(リズムを分ける) など</p> <p>○たくさん役割があるような包括的な教材、題材を考える。</p> <p>○共通の興味・関心をもとに教材や活動を考える。</p> <p>(3) ねらい 授業を行う学習集団において、実態が異なるからこそ、学習集団全体のねらいを設定することが大切となる。その際、把握した一人一人の実態から個別の目標も押さえていくことになる。つまり、授業のねらいは一緒でも、目標は個別になる。</p> <p>(4) 指導計画 具体的な指導計画を立てる上で、全員が参加でき、目的を共有できる学習活動を設定するために、次の点に留意する。</p> <p>○個→集団の一方通行ではなく、子どもの様子に合わせて行き来(往還)する。</p> <p>○それぞれの学習の段階を細かくみて、教材・題材の中で学習できることを細かくリスト化して全員に合致するように教材を決める。</p> <p>○課題分析。動作(技能)、スキルを細かく区切る(細分化する)。一つ一つのステップを成功させていきゴールをめざす。</p> <p>○モジュールステップを考える(難易度、量、最初→順に、ゴールから徐々にさかのぼる、時間、場所、距離、人、手助けの量、手助けの種類)。</p>
<p>2 授業内 (1) 実態個と集団をつなげる工夫 ○集団が動く中でも、個への配慮は忘れないで行う。 ○子どもの動きや思考、取組の様子を周囲へ伝えるようにする。 ○個別学習をしている場面でも、友達とやりとりができるような促しをする。 ○学び合いができるようにする。 ○一人一人の子どもの得意を生かして役割を与えたりする。 ○教師が生徒同士の間をつなげる役割になる。 ○子に応じた支援具を活用して、共に活動できるようにする。 ○集団に入れない子は教師が誘う 例) ①やることがわからない場合は、一緒に活動する。 ②子どもが何か意図があつて集団から離れている場合は、その気持ちに寄り添う(離れた場から一緒に)。</p> <p>(2) 活動の工夫 ○導入とまとめを全体で行い、展開部に個々の学習を取り入れる。 ○T Tで2~3人の教員がいるので、一斉の中で小グループを作って授業する。 ○それぞれの目標に対する学習時間を確保する。 ○学習活動の流れを簡単にする。あるいは、分かりやすく提示する。 ○授業の流れをかえない。①→②→③でやることを決め、大元の形をかえずに繰り返す。子どもがやるべきことが分かるようにする。 ○イラストや音など、視覚や聴覚からアプローチする場面を増やす。</p>	<p>(3) ティームティーチングの工夫 ○個々のねらいをホワイトボードに書いて確認など、ねらいの共有をする。 ○所在の把握。お互いの状況、全体+個別にならないようにする。 ○共有する時間をもつことが難しい場合、メモや引継ぎノートを使う。 ○授業前後のすりあわせを行う。 ○T T連携を明確にするために、授業における役割の分担など明確にしておく。</p> <p>(4) 環境設定の工夫 ○一人一人の子どもの適した活動を設定する(できる状況づくり)。 ○座席配置を工夫したり、お互いの活動が見える環境設定を行う。</p> <p>3 授業後 授業後に、チームを組む教員同士で振り返りをし、以下の点などの改善を行う。 ○今日の子どもの様子の振り返りを。 (できたことなど) ○子どもの反応を見て、活動、ねらいの見直しを図る。 ○必要に応じて、座席や教材教具の見直しをする。</p> <p>4 おわりに 実態の異なる学習集団に対する授業づくりは、教職経験の長短にかかわらず、特別支援学校における専門性にかかる課題であると受け止めている。今回まとめたことをもとに、一人一人の子どものためのよりよい授業実践をめざしたい。 (上記の内容は、R5.7.28 本校校内研修におけるブレインストーミングの結果をまとめたもの)</p>

資料1 研修の中で付箋等にかかれた意見を整理してまとめた資料

本研究で行った研修のような教師の困りごと等をもとに、一人一人が日々の実践の中で大切にしていることや工夫していることを気兼ねなく語り合い、互いの意見を共有し、それをまとめて蓄積していく。こうした研修の積み上げが、学校としての同僚性やチーム力を高めるとともに、今、求められる専門性を有する特別支援学校になりうるのではないかと考えている。

5 結語

本研究は、特別支援学校における実際の研修を通して、学校としての専門性を蓄積・担保・共有するための研修について考察することを目的とした。結果、研修に参加した教師の研修直後の感想や意見から、教師の困りごと等をもとに、一人一人が日頃大切にしていることや工夫していることを語り、交流する研修が有効であるととらえることができた。今回のような研修を積み上げ、学校としての専門性の蓄積・担保・共有を図ることで、持続可能な特別支援学校を創り上げていくことが今、望まれているのではないだろうか。

謝辞

本実践にあたっては、群馬県総合教育センターのご理解と本校校内研究会に参加された県内特別支援学校の初任者教師の協力をいただいたことに御礼申し上げます。

付記

本稿の執筆者4名の役割は次のとおりである。筆頭著者及び実践者は福田、研修計画及び実施に向けた助言は南雲、堀込、執筆指導は、木山が務めた。

引用文献

- 1) 文部科学省初等中等教育局長通知(2007)「特別支援教育の推進について(通知)」
- 2) 新しい時代の特別支援教育の在り方に関する有識者会議(2021)「新しい時代の特別支援教育の在り方に関する有識者会議 報告」
- 3) 石塚謙二(2012) 全国特別支援学校知的障害教育校長会編著『知的障害特別支援教育における専門性の向上と実際』ジヤース教育新書, 2-6
- 4) 柴垣登(2017)「特別支援学校教員の専門性向上のための諸課題についての考察」立命館教職教育研究4号, 11-20
- 5) 久道佳代子, 小谷裕実(2020)「特別支援学校における校内研修の実態と課題」京都教育大学教職キャリア高度化センター教育実践研究紀要第2号, 59-68
- 6) 飯村恵(2021)「学び合う学校研究～ホワイトボードミーティングの実践～」全日本特別支援教育研究連盟編集『特別支援教育研究』2021年6月号 東洋館出版, 10-11
- 7) 近江ひと江, 柳川公三子(2016)「富附特支型モデル「学びあいの場」の推進」富山大学人間発達科学部附属特別支援学校 年報, 12-14
- 8) 昼間友彦(2022)「授業改善を通して教員同士で支え合い若手教員を育てる授業研究システム」『実践みんなの特別支援教育』2022年3月号 Gakken, 20-23
- 9) 澤田隆視(2022)「初任者が多い現状と指導教員としての取り組み」『実践みんなの特別支援教育』2022年3月号 Gakken, 14-16

(ふくだ ひろし・なぐも りょうた・ほりごめ なおみち・きやま けいこ)